

教育とアクセスのし易さ

原 野 利 彦

Education & Easy of Access

Toshihiko HARANO

【問題意識】

我々は子どもに「情報」の選択の仕方を学ばせるという。だが消費社会において世界の分化は激増し、益々個別的で断片的なものとなっている。この多様性というよりも断片化のなかで我々自身が選択に迷い途方に暮れている。子供たちは、この混沌とした日常性に耐えていくには、それと戯れながら生き延びるほかはない。

ところが学校教育をはじめ、各分野では「情報」及び「問題解決」という概念によって situations を再定義し何とか現状を打開していこうとしている。特に教育の世界では、いかにも勝算ありげに断片的な状況を情報という次元へ変換し定式化する訓練を施している。

「問題解決」的思考というのはなほだ漠然とした図式にしたがって、問題を見つけ、仮説を立て、検証するという手続きによって、「個の確立」とか「自ら学ぶ」などということが可能だと思込まれている。

ではなぜ今「個の確立」は困難となり、「自ら学ぶ」ことが忌避されるのか。子どもは益々惰性に流れ、群れ、あるいは孤立し、脆弱になっている。「体験」重視がさかんに叫ばれるゆえんであろう。だが、実は、今の教育は「子供の現在の体験そのもの」を重視することをやっていないのではないか。むしろ「体験」概念のすり替えをやっていないか。もしこのことを曖昧にしたまま体験重視を言っているにすぎないとすれば、その教育活動は子供益々窮地に追い込むことになるのではないか。

1. 「体験」概念に潜む「主体」と「有用性」という暗黙知

事実、我々は日常生活において「体験」について色々と語る。この語り得るということによって、体験が文脈を備えたものであり、そのことが体験の「意味」を構成するということが出来る。つまり「直接的な」体験といえども「媒介」的（間接的）なものであり、或る文脈を備えて（認識されて）いるのである。

その時我々は、(1)「語る主体」があること、それが「個人」とほぼ同義であること（法人などはこの「個人」の擬制としてあること）、そしてこれを中心にして世界の分節が始まることなどを自明であるとしている。つぎに(2)この語る主体は「有用性」に従属する。それも「保存」（生存）、「所有」の下位概念としての有用性に従属する。

つまり、「直接的な」体験といえども、暗黙のうちにも多様な媒体（文脈）に支えられているのである。それは将来に備え、存続し、自分や家族や国家について考え、子孫に富を譲渡する可能性について考慮し得ることが当然とされている文脈の中に成立する「有用

な個人」という文脈である。「生涯学習のための基礎学力」などの教育用語は、そのことを端的に言い現している。それは或る人間の企てが死や病氣や事故などによって挫折させられるとしても、他の個人や集団によって引き継がれるであろうし、そのためにある程度の恒久性がある文脈をもつ「所有」が慣習化されている文脈における「有用性」の中での個人であり、その個人「体験」である。この「有用な体験」の文脈を守り抜き継続することによって、我々は個々の存在の危うさ（死・挫折・崩壊）に対して必死に抵抗しているとされるのである。

だからこそ我々はその暗黙の媒体（文脈＝「暗黙知」）を「発掘」して、意識を「深化」して様々な体験をシミュレートすることが出来る。それは「中産階級」的に意識を平準化させる働きを持つ。つまり既存の社会や階級のもつアンビバレンスや暗い部分を見えないところに放逐し、意識から抹殺する排除の構造もこの暗黙知の働きとしてある。

かつてJ.Deweyらは、この過程を生産活動に範をとる目的的行動の文脈に持ち込み、「適用」や「適応」概念をキーワードとして、個々の反射のモザイク的統合という見解を越えるという思想に結実させた。「目的」という概念の中に儀式的に反復可能なものを未来に投影する近代思想の生産主義的な変形の一つである。特に19世紀末からの科学技術的行為が生活の主流を占めていくにしたがって、この「問題解決」という思想の方法は通俗化されていった。問題定立と仮説と検証行為が相互にコピーし合う関係（ルール）は重工業的な機械にモデルをとるシステム化の一層の進行をはかる過程として構想された。この過程が他のルールを圧倒して、混沌の中から図として浮かび上がり、この図の中での動きが優位の意味ある行為として認識された。

近代社会の進展は分業の進展である。社会は各領域に分化一分科され、それぞれの領域は自らを認識するための方法……つまり「科」学を持つに至る。こうして社会の全領域は科学技術化されることになる。そして科学技術化された各領域は能率や効率の増進という共通尺度を持ち、有用性を共通の価値とする。各分野で科学技術化を進めるということは他の社会の様々なシステムに接合され、その中で機能し得る（役立つ、有用である）ことを意味することになる。問題解決とは複雑な世界から「科学技術的に状況を抜き出し、それらを結合する」過程という性格を強くもつに至った時代の認識論である。

J.Deweyはこれを「習慣を作りなおす習慣」として、つまり「習慣の二重性」として示した。この図式こそ旧習への固執とラディカルな改革とのいずれにも属さないとして、「イノベーション」の図式として登場した。つまり「進歩」、「成長」、「再構成」、「開発」などのシンボルが「問題解決」過程を支えていたのである。これらは各局面の相互参照（コピー）の関係を支えるシンボルや概念が事態が「変化」したか否かを判定する基準を与え、変化という概念を意味あるものにする時間・歴史のシンボルである。それらは問題定立、仮説、検証という各局面の相互コピーの反復が変化をもたらすという意識を可能にした。

2. 文脈の成立困難な時代

だが社会の変動が激しくなったり、より広域の活動が相互依存関係に入り始めると暗黙知が意識されざるを得なくなる。つまり相互に学び合う（コピー）関係を支えていた暗黙のルールがあらためて検討されざるを得なくなる。コピーのルールは分断され、相互を調整する方法も方角も見失われる事態が頻発する。今まで自明に見えた生活する世界が急に

迷宮化する。今まで考えられていたような、個々の領域はあたかも分離可能な作業方式を持ち、各人はそれぞれ自分の役割を遂行していればいいという世界ではなくなる。一意専心に振舞うことが困難になる。今まで一様に見え、かつそのように振舞ってきた各エージェントが様々な相貌をもつ伝達者に変化し、予想や期待に反する行為をとりはじめる。我々は今まで能率的に進められていた様々な活動が如何に多くの錯綜した暗黙知に支えられていたかを痛感し愕然とする。世界はもはや単に多様性という言葉で済まされないような迷宮となる。プロセスは内外の入れ子状態になり、もともと外部の問題であったものが急に内部化したり、内部の問題が外部のそれであったりする。こうして不条理、滑稽が表面化する。つまり、近代的に区分され領域化された夫々の囲いに内在する「外」が垣間見られてくるのである。自らの内部で差異づけが輻輳し始め、囲いの中心が狂いだす。内外の区分は曖昧となり、異質の時空間がぶつかり合い、その間での「訴訟」が頻発するが、審理の手続きも、裁定の基準も不分明であり、基準のヒエラルキーも定かではなくなる。

「問題を解決する」と思いこまれていた過程は、差異づけを模索しつつ中心を狂わす過程に変質してしまった。それは些末な「調整」過程に変質した。日常的な瑣末な駆け引き、勘違い、迂闊さなどがプロセスの内実をなすことになる。S.Freudの言う第1次過程めいたものが表面化する。

3. 〈陶酔への軽視と憧れの同居〉と〈寛容〉

文脈の成立困難な時代とは体験と行為の可能性が顕在化できるよりも常により多く存在するという世界の複雑性に気づかざるを得ない状況が無数に噴出する時代のことである。それは現実と虚構の差異が不分明になる事態が頻繁に起こることを意味する。つまり〈現実-虚構〉や〈顕在性-潜在性〉とに分化させるというような2元的構造で世界が理解できなくなるのである。

現代は「願いを課題へ変換する」などということが粗末な楽天主義であることが露になる時代である。願いや課題という形として捉え得る文脈そのものが朦朧としてきているのである。体験（行為）によって顕在化できる事態を「現実」と思い込んでいた思考法は、その体験そのものを規定していた枠組みの虚構性に気づかざるを得なくなる。人は体験によって顕在化できる事態を遥かに越えたものがあることを痛感せざるを得ない。

ここでは人はこのような迷路を彷徨うことに耐えかねて、頂点を究めるような「陶酔」の瞬間に憧れる。そのような瞬間を本来の自己、真の生命と見做して、「自己実現」の高度なものを手に入れようとする。しかし他方では近代的な一元的な原理による支配はもう脱却したいと願ってもいる。今や一元的な原理を道しるべとして「努力」することは忌避される。だから、この「自己実現」へ至る道の厳しさを回避し、多様な生き方への「寛容」や「優しさ」が求められている。アクセスのし易さと頂上体験への渴望が同居する。麻薬による手っ取り早い陶酔の入手が社会現象となる。

4. 穏やかな道徳主義に姿を変えた生死の問題

今では、「自由」、「死」、「生きる」ことを真摯に求めることよりも、好意と優しさと礼儀正しさが羽振りをかかすようになった。宗教の次元の安楽死である。

これを少し検討してみよう。そもそも我々が個別性を要請するに至ったのは、一般化さ

れた図式や規則を越える過剰なものがあることに気づくからである。そしてこの過剰性とは、体験と行為が顕在化できるよりも常により多くの可能性が存在することを意味する。(埴谷雄高の「未発」もこれに類するであろう。)

上で言う「一般化された」とは或る特定の期間において「現実性」を僭称する顕在的体験の地平と遠近法を意味するものであると考えてみよう。そうすれば、この地平と遠近法は、(1)〈科学的に検証された現実〉なる『安全性』の確保という価値(生命力)から発するものと、(2)現実をも含めてすべてを仮象として提示し得る或る虚構の地平(例えば、夢や芸術)の地平と遠近法とに分けることが出来る。

まず(1)について……現代では相互批判、相互否定やアウフヘーベンを可能にする一義的なインターフェイスが予定され得ない。境界不明の関係は相互の否定関係を非常に複雑化し、一義的な乗り越え、アウフヘーベンを不可能にしている。今や実験的思考を支えてきた一義的自己の概念力を失い、多義的なインターフェイスの時代における分身、変身の問題が前面に出てきた。「飛躍」(メトニミー)という要素が力を得るとき、否定を平和的な一時的退避という形で理解することには限界がある。

この時「問題解決」に固執することは、「体験」を位置づける我々の思考をいつまでも近代的な有用性に屈伏する思考の習慣に縛りつけることになる。それでは「問題解決」によっては捉え切れない「体験」そのものの価値を放棄させる方向に我々を回収してしまうことになる。

もし教育が「問題解決」に固執すれば、それは有用でないものから習慣的に目をそむけてしまう行為を称揚し、この有用性を原理にまで高め、人間の行為全体をこの原理に還元してしまおうとすることになる。そしてこの有用性の原理が権力を占拠していることに異議を申し立てることは「非現実的」なことのように思いこませることになる。

確かに〈科学的に検証された現実〉なる『安全性』の確保という価値(生命力)も、現実を仮りのものと見做す。「見通し」などはその地平において指示される他の体験や行為の可能性への期待を可能にするが、それは単に可能性であるかも知れず、したがって期待されるそれとは別様の事態も生じうることを示す事柄、つまり危険や幻滅のリスクと必ず関わり合いになるということも心得てはいる。

そしてトートロジカルに反省的思考を展開する主体というものは、すでに境界が知られた世界でのみ通用するものであり、そのために、「或るものを否定し、より上位の肯定を探る反省」という「深化」や「向上」の原点としての主体という考えは不毛であることも知っている。トートロジカルに反省的思考の前提には否定する基準が常識(もしくは万人が共有するものと想定された西欧的コモンセンス・良識)があると指摘され、だから西欧近代の思考のエートスは越えられねばならぬという議論が盛んになされる。

例えば、このようなトートロジーを越える否定作用として、ルーマンは否定とは除外したものを保留しておくという手続きだと定義し直した。つまり、否定された要素は除外されるのではなく、他の場において復活しうることされているのである。このとき、主体とは取り合えずの境界設定をする機能になる。主体とは境界設定をする非連続の過程そのものである。だから主体は異質性の組み合わせから組み合わせへと絶えず飛躍し続けることが可能であるとされる。ここに微細なレベルで生じる権力の関係・調整・駆け引き、抑圧のプロセスを詳細に描く可能性が開かれるとされた。(諸政策論に服従する諸学問……ま

た反抗としてのメトニミー)

勿論、このような地平と遠近法も安全性を求める身振りの範囲内にある。例えば諧謔がある。巧妙に異質のものを出会わせる諧謔は、差異づけがなされ得る境界を模索していく過程であるため、既存の文脈という囲いの中心を狂わせ、複数で異質の宇宙の間での基準を巡る戦いの過程でもある。それは裁定を求め、裁定の基準を争う訴訟の過程でもある。それは楽しみをももたらす。この差異づけを模索しつつ中心を狂わすとは、日常的な瑣末な駆け引き、勘違い、迂闊さなどのプロセスを探る「第一次過程」の概念によるFreudの「失策」、「夢の機能」などの分析がウイットに関する研究と関連して「安全圏」に囲い込まれる。

学校教育においても、「問題解決」という図式への還元のプロセスを多元化させる方法で「安全圏」への囲い込みが試みられる。ここでは、おたがいに一時的で異質な鳥々として局所化している各サブシステムを「情報」の操作により調整し得るものと前提されている。そこでは、情報を各個人が自分流に曲解（解釈）し、意図的もしくは無意図的にお互いに操作し合うことが当然とされる。

しかしこのことは、集団や個人は情報を担う実体としての地位を失わせる。操作主体も不明なものとなり、形式と化した権力がこの複雑化した過程をシミュレートする。「現実」は益々虚構に近付いていく。所謂Virtual Realityこのような社会状況において語られる。この例として、双方向コミュニケーション（情報公開、学生による教師の評価なども含めて）の回復の主張がある。それは近代の官僚制的なトップダウンのコミュニケーションへの批判として意味ありげには見える。それは一般的図式と個別的Situationsとの相克などの粗雑な図式をもつために説得力に富む。

端的に言えば、いわゆる「個の確立」とか「願いに向けて、自ら学び続ける」などという次元を越えて、「問題解決」という形式のみが権力をもつに至る。誤りを訂正するとか、基礎力をつけるなどの主張は説得力を失い、如何にその状況と馴れ合うかということがリアリティを持つようになる。原則・関連性は次々に作り出される欲望らしきものの連鎖の中で不明なものとなり単なる「合理化」という性格を剥き出しにしてしまう。そこではあらゆるものが「雰囲気の投機」の対象となり、教育も貧困や環境破壊も、レトロ的闇市的雰囲気も売りものになる。これが「個の願いに向けての学習課題」の内実である。

次に(2)について……この場合、虚構（メディア的時空、芸術）の地平と遠近法とは仮象としての世界に耐え、生命力を増強させ、生きる喜びをもたらす地平と遠近法を可能にする図式であるという考えも成り立つだろう。

だが、我々は矮少な「現実」としての虚構の中に生きている。日常の我々はいつも或る一般図式の中に困われの状態にいることに気づく不条理に脅かされている。また、その一般図式に適合することに違和感を感じざるを得ないことを弁明しなければならないという不条理な状況に脅かされている。

判断基準や図式を描くはずの専門機関や法廷らしきものも信頼できるものとも思えず、別の所で重要な判断が行われているような不明な状況。官僚的指導や裁定が行われる役所らしきものの奥にある迷路、人間関係（性的関係までを含めて）、秘密の場所、そこで裁定ならざる裁定らしきもの、裁判ならざる裁判らしきものが行われること。教師や専門家や弁護士のようなものに頼みに行くことによって引き起こされる事態の矮少化、もしくは

はすりかえ。人は実効あることをせざるを得ないこと、実効あることをしようとしても不条理で馬鹿馬鹿しいことしか出来ないこと。全体的にこのような馬鹿ばかしさの中にいることの馬鹿ばかしさ。そして最後には分けの分からない結末を押しつけられ、責任を負わされてしまう馬鹿ばかしさ……このような不条理感、徒労感の中で我々は教育的場づくりに励まなければならず、子供たちも学習しなければならないのである。

5. 日常の中で戯れ・安易な慰め

この場合、我々は矮少な「現実」としての虚構を脱し、大いなるものとしての「虚構」、ドラマ的な虚構へ向うことを求めることが出来るであろうか。せいぜい日常の中で戯れ・安易な慰めを求めざるを得ないようになっているのではないか。

事実、消費活動（またこれの教育版としての学習）を通してこれが追及されている。ここでは頂点を究めるような「陶酔」の瞬間への憧れが可能であるかのような偽装がなされる。本来の自己、真の生命と見做して、「自己実現」などという名の高度なものを手に入れるような疑似的「信念」が振り撒かれる。

我々は迷路を彷徨うことに疲れ果て、耐えかねている。そして「自己実現」のような恍惚の瞬間を手に入れようとして、いつも挫折する自己を責めたてる。陶酔の欠乏、更に進んでは、不安や神経症、様々な不健康に陥らせ、ついにはそれが不治の病になる。

現代の日常とは、情報を担った商品によって内外を分節化することである。我々は理想・目的・希望への代用的媒介として商品に頼る。商品は「老若男女」などの社会的カテゴリーや、上品・下品などの価値の上下を体現するものとしてある。それは豊富なオルタナティブの取り揃えとしても現実性をもっている。現代ではすべての選択肢が消費財化されており、我々はこの中を浮遊する。これが日常の中で戯れ・安易な慰めという地平をつくり、高度な「自己実現」という頂点を究めるような「陶酔」の瞬間の不足に悩む素地となる。

情報を担った商品、つまりアクセス容易なメディアという文化や教育を装う福音は、安易な道（近道）を求めさせ、そして道を失わせる。砂漠の中でへとへとになった者にとっては、このアクセス容易な情報とは何と有難いことだろう。同時に何と「陶酔」の瞬間が不足していることだろう。

6. 粗雑な知性による「能力養成」

粗雑な知性は、どんな雑多なものをも消化することなく呑み込み、ごたごた混ぜ合わせ、次第次第に自分の意味をなすりつけることが出来る。単純な図式は教師に特に好まれる。それは商品による文化のミニチュアづくり、地図づくりの機能によく適合する。学校のカリキュラムは商品が展示された店頭のように、単純化されたすばらしい世界の縮図である。我々はその中を羅針盤、基準、計器として働く消費財（教材）の一つ一つを手に取りながら学ばなければならない。興味関心の名の下にこの世界をわくわくしながら探索することを強いられる。わくわくしないものは能力がないとされる。非言語的コミュニケーションまで網羅できる強い動機づけを可能にする教材（商品）が求められる。この操作のためには非合理的なもの、無意味なものなどに関する用語も動員される。

7. 矮少な力の感情に精通した者

消費社会を浮遊するために力の感情に精通していない者に対して、教師は偉大な力を振るうことが出来る。教育は現代の複雑性を強調し、人々に対して刻々の方向転換を迫り、安定した日常性を絶えず突き崩すことを強いる。我々は日常的・伝統的世界解釈を越えて、複雑性への対処能力を拡張していくことに強迫的に追い立てられる。だが同時に、我々はこの消費社会を全くカオスとは捉えないようにも教育される。そこでは「イノベーション的保守」とでも言うべきものを確信すれば「安全に暮らしていける」という信念をもつように仕向けられる。そこに教材（消費財）が意味の担い手として資格を疑われない理由がある。目まぐるしい商品の変転に振り回される日々も、教材としての商品特有の画一的基盤によって支えられているのである。教材（消費財）は「いま、ここ」（実存、場）への熱望を叶えるように見せ掛ける。教材（消費財）の所有・消費は欲求の根底的満足とは異質のものである。教材（消費財）は実存・場への欲求をはぐらかしながら意味を回復する振りをする力を持つだけである。

教材（消費財）は次々にスタイルを取り替えることが可能なため、意味の変化の担い手としての資格を疑わずにすむ側面を持つ。それは人々に文化戦略をたてる際の基盤を提供するもののようにさえ見える。教材（消費財）は永遠に将来を考えることを保証する装置のように作用し、人を変化に駆り立て続ける。「もう少しで実力が手にはいる…」というような出現の仕方をするために、日頃の生活スタイルを越えるような「少し上のものの提供」の申し出を受け入れる動機づけを強化する。しかも受け入れたばかりの情報が部分的なものにすぎないために、単なる仮説的なものであり、来たるべき出来事のリハーサル、消費訓練の道具としていつでも廃棄処分にできるもののように見え、決して意味全体を僭称したりはしない。したがって人はやっとのことで入手したばかりの情報でも、簡単に陳腐なものとして廃棄できるのである。

現代人は情報の入手という「いま、ここに」の回復の暗示と、すれすれで手の届かない処置の狭間のなかに閉じ込められる。人々は或る情報を廃品として宣言し陳腐化することをもって、古いものの克服をすると錯覚し、より上位の情報への憧れや気分の醸成をもって向上心と錯覚する。それはイノベーションへの無前提的な信頼や、イノベーション気分への鋭敏化として個々人に内在化される。生活の意味づけは購入する、もしくは購入した情報に意味を生き渡らせることと同義になる。こうして新しい情報を買ひ込むことでもたらされる不安定な気分を解消、合理化しようとする。各商品（情報）は何と多くの説明に満たされていることか。生活の意味づけとは消費による不安定な気分に対抗する商品の意味の主張（合理化）の絶望的な努力である。広告は今から購入するもの、またはすでに購入した商品（情報）を合理化する努力の結晶である。こうして人々は明日に希望をつなぐため、常に新しい情報・モノを持つとする習慣を定着させていくのである。まさにこれが「イノベーション的保守」を支えるものなのである。

商品（情報）のみが自己と世界についての理念の漂流を防ぎ、自分が誰であり、誰でありたいかを告げる媒体となる。商品（情報）は本当に意味ある生活を送っているか否かの徹底した見当を免れさせてくれる。絶え間ない差異の提示と生活の全面的見当を不可能にする商品（情報）は、限られたアクセスの再確立だけが可能な世界の中へ人々を幽閉するのである。人々はこの理想の束の間の所有を楽しむ事をもって現実と考える習慣を身に付

ける。

世界の複雑性を圧縮するシステムを主体と呼ぶならば、消費のシステムこそ主体と呼ぶに相応しい。消費のシステムは自己以外の何者にも依存しない。売買の場に登場することは総てのものの願いとなる。モノは売るために生産され、人々は自分を「売り出す」ために「学習」する。消費システムはまさに主体である。そのシステムは機能的に組込みうる物事の種類、能力を弁別する。そして個々の担い手の水準を決めたり変更する能力を有する。

かつてこの主体システムを我々は自立する個人に求めた。デカルトのいう我である。だがこの Identity は揺らいだ。強い自我を持つことは忌避され、弱い自己を他人の優しさの中で憩わせることが美德となる。

こうして「虚構」を求める生き方も、「問題解決」の美名の下に消費システムに回収される。「問題解決」のシステムとは消費システムである。これに対して疑いを持つことは、罪であり、非現実的である。我々は、この「問題解決」の構造が欠けていたら、人生や世界は意味を成さないであろうと考えるに至る。この考えに慣れてくると、その考えのない人生を好まなくなる。「問題解決」の構造で人生をおくらない人を好まなくなる。

8. 消費文化の情報化のプロセスをなぞる教育過程

「複雑性」を縮減する文化体系を消費財のなかに実体化する広告が形成されるプロセスと教育過程とを類比してみよう。

- (1) 教育内容・教材の特定化……消費財の性格の決め方や、それをどういう風に広告に描き出すかというような特定化……広告形成のプロセスでは先ずその財に相応しい文化的属性の特定化が行われる。それは自然を称揚する文化の使者であるのか、または都会的なセンスを運ぶ媒体か、もしくは野性的な魅力を可能にする小道具か、…という風にモノの位置づけの特定化のプロセスをもって始まる。
- (2) 発達段階・個性化……消費者を最終決定者・参加者として位置づけるあり方……そしてその商品の広告中の人物は男女のいずれが相応しいか、年齢はどのくらいが適当か、職業は何がよいかなどという特定化が行われる。これらは無意識的な選択過程であるが、それゆえにこのプロセスは当該社会の特徴を表現するものとならざるを得ない。
- (3) 教師・リーダー……これはオピニオン・リーダー、スターから学ぶことが求められる。教師にも「意外性」が求められる。そのための支えとして、ファッション界はラディカルな変革に従事しているという神話があり、年齢、性別のカテゴリー侵犯者による支え（ゲイ、ヒッピー、パンク）やジャーナリストによる二重の支え（論評、ゲイトキーパー）というモデルがある。
- (4) 生活活動の指導……消費財は所有されることによって消費者へ文化的意味を伝達し内在化させる。誕生日、クリスマスのプレゼントに見られる「交換儀式」。そこにおいて働く語法は、贈り手の役割を消費社会に適合するように規定し、受け手もそのコンセプト語法で自己定義するように勧誘される。贈り物のシンボリックな属性も消費社会的である。おもちゃの腕輪を贈られる女の子は、そのおもちゃの腕輪に相応しい装いをする女性になってもらいたいというシンボルを贈られるのである。このように消費財を通しての影響力の行使、シンボル性を染み込ませていく過程はきわめて消費社会的である。

奇麗にし、論議し、比較し、反省し、顕示し、撮影する等の「所有儀式」も市場経済における購買能力の誇示、モノの能力によるステイタスの誇示なのである。またヘアスタイル、衣服、住居、車の手入れに注がれる異様な時間とエネルギーは、モノを撫でまわして日々をおくる現代人の「手入れの儀式」といえる。毎日熱心に車を洗い、昨日くっつけた古い意味を払拭し、古い意味の感染を防ぎ、新しい意味を付与しようとする行為はまさに消費社会的「再生の儀式」といえる。

- (5) 個性化……消費は個人をも定義する。かつて工場的装置によって一貫性ある努力を続けるモデルにもとづいて定義されていた個人は、今や消費のプロセスの完成段階をなすユーザーとして定義し直される。消費財に担われた文化的意味が消費者としての個人に定着することがその個人固有の定義と同義になるとき、個人の定義とはモノの表意性をシステムティックに利用することと同義になる。人はその利用を通してのみ（もしくはそれによって初めて）自己定義の自由を手にいれることが出来る。つまり、自己定義の自由とは消費財から各人各様の意味を引き出す自由なまで縮小される。

消費システムは意識的に断片化しては再統合していくことを続ける生活を送ることを強制する。この強圧的な状況の連続からくるストレスを癒すにも、人は消費財からその意味とマッサージ効果を受け取ろうとする。（やさしさごっこ、優しい男女の合いのテレビドラマ時代劇まで！）

しかし、意味づけのための分節化の第1歩としての内外の区別をつけることに人々は躓く。つまりモノを購入しうるか否かという分岐点が先ずあって、その後そのモノを通しての文化を享受することができるというプロセスが習慣化されているからである。消費財は先ず売買という出入口で新来者を選別し、内外の分節化に不案内なものに対する支配権を確保する。新来者は消費財に関する情報によって、内と外との違い、つまり購入してその文化を享受する者と購入せずに（または購入できずに）文化の外部に止まるものとの差異を強烈に意識させられる。この境界、敷居を意識し、この敷居を跨いで中に入ってから行動は、テレビ、学校の教材を通じて前もって教え込まれている。テレビや教師は、この混沌とした外界を消費財によって如何に分節すれば安全に操作できるかという問いや、内部を消費財によって如何に分節すればうまく生活できるかという問いに答える能力を前もって作り、その決断の努力に悩まされないように能力をつけてやる。

こうして消費社会に生きる我々は消費財を巡って刻々の方向転換を余儀なくされる生活に慣れるように学習させられる。これは大量生産システム的な日常性の乗り越えとして意識され、斬新な教育活動が工夫される。これは日常的・伝統的世界解釈に執着することなく、複雑性への対処能力を拡張していく生活スタイルの獲得への動機づけとして働いている。これを人は「生涯学習」と呼ぶ。

結語 カタストロフ願望の危機

この消費社会の不変の勝利を見ることほど疲れるものはない。一切は永遠に続くように思える。絶望と紙一重の倦怠、思考と魂の歩みには希望がなく、流される血はことごとく消費社会という大きな蜘蛛に飲み干される。疲れた傍観者が抱く言葉のない憎悪は、根底的な破壊を夢想することによって、この永遠のシステムを嘲笑しようとする。